

## 敬愛大学 教育原論リアクション（4月27日）

テーマ： 遺伝と環境、母なるもの、父なるもの、ジェンダー  
番号 名前

- 1 漱石「夢十夜」(第6話)の主題は何か。(プリント)
  
  
  
- 2 「大きな木」をどう読むか。(プリント)
  
  
  
- 3 母親とは、どのような存在か。母なるものとは何か。(武内、江藤、藤原)
  
  
  
- 4 父親とは、どのような存在か「父なるものとは何か(河合)
  
  
  
- 5 日本的子育ての特徴は何か。(テキスト 6ページ)
  
  
  
- 6 予言の自己成就とは何か。(テキスト 4ページ、97ページ)
  
  
  
- 7 セックスとジェンダーのずれ(違い)は、何を意味するか。
  
  
  
- 8 上記の内容に関して、他の人の意見を聞く(コメントを書いてもらう)  
( )→  
( )→
  
  
- 9 全体の感想・コメント、印象に残ったこと。



運慶（うんけい）が護国寺（ごこくじ）の山門で仁王（におう）を刻んでいるという評判だから、散歩ながら行ってると、自分より先にもう大勢（おおぜい）集まって、しきりに下馬評（げばひょう）をやっていた。山門の前五、六間（けん）の所には、大きな赤松があって、その幹が斜めに山門の庇（いらか）を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗（しゅぬり）の門が互いに照（うつ）り合って美事（みごと）に見える。その上松の位地（いち）が好（いい）い。門の左の端を眼障（めざわり）にならないように、斜（はす）に切って行って、上になるほど幅を広く屋根まで突出（つきだ）しているのが何（なん）となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中（うち）でも車夫（しゃぶ）が一番多い。辻待（つじまち）をして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなもんだなあ」といっている。

「人間を棒（こしら）えるよりもよっぽど骨が折れるだろう」ともいっている。

そうかと思うと、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私（わっし）やまた仁王はみんな古いのばかりかと思ってた」といった男がある。

「どうも強そうですね。なんだってえますぜ。昔から誰が強いって、仁王ほど強い人あ無いっていいますぜ。何（なん）でも日本武（やまとたけの）尊（みこと）よりも強いんだってえからね」と話しかけた男もある。この男は尻（しり）を端折（はしょ）って、帽子を被（かぶ）らずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細頗着（とんじやく）なく鑿（のみ）と槌（つち）を動かしている。一向（いつこう）振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔の辺（あたり）をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい鳥帽子（えぼし）のようなものを乗せて、素袍（すおう）だか何（なん）だか別（わか）らない大きな袖（そで）を背中で括（くく）っている。その様子が如何（いか）にも古くさい。わいわいっててる見物人はまるで釣り合が取れないようである。自分はどうして今時分（いまじぶん）まで運慶が生きているのかなと思った。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立って見てていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体（きたい）とも頗（とん）と感じ不得い様子で一生懸命に彫（ほつ）ている。仰向（あおむ）いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、「さすがは運慶だな。眼中に我々なしだ。天下の英雄はただ仁王と我れとあるのみという態度だ。天晴（あっぱ）れだ」といって賞（ほ）め出した。

自分はこの言葉面白いと思った。それでちょっと若い男の方を見ると、若い男は、すかさず、「あの鑿と槌の使い方を見給え。自在（だいじさい）の妙境に達している」といった。

運慶は今太い眉（まゆ）を一寸（すん）の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯（は）を堅（たて）に返すや否（か）らずに、上から槌を打ち下（おろ）した。堅い木を一（ひ）と刻みに削て、厚い木屑（くず）が槌の声に応じて飛んだと思ったら、小鼻（こばな）のおっ開（びら）いた怒（いか）り鼻（ばな）の側面が忽（たちま）ち浮き上がって来た。その刀（とう）の入れ方が如何にも無（ぶ）遠慮であった。そうして少しも疑惑を挟（さしはさ）んでおらんように見えた。

「能（よ）くああ無造作に鑿を使って、思うような眉（まみえ）や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独言（ひとりごと）のように言った。するとさっきの若い男が、「なのに、あれは眉（まみえ）や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋（うま）っているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違はずはない」といった。

自分はこの時始めて影刻とはそんなものかと思いついた。果（はた）してそななら誰にでも出来る事だと思い出した。それで急に自分も仁王が彫って見たくなったから見物をやめて早速家（うち）へ帰った。

道具箱から鑿と金槌（かなづち）を持ち出して、裏へ出て見ると、先達（せんだつ）での暴風（あらし）で倒れた桺（かし）を、薪（まき）にするつもりで、木挽（こびき）に挽（ひ）かせた手唄（てごろ）な奴（やつ）が、沢山積んであった。

自分は一番大きいのを運んで、勢いよく彫り始めて見たが、不幸にして、仁王は見当らなかった。その後にも運悪く掘り当（あて）る事が出来なかつた。三番目にも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片つ端から彫って見たが、どれもこれも仁王を藏（かく）しているのはなかつた。遂に明治の木には到底仁王は埋つていいものだと悟つた。それで運慶が今日まで生きている理由もほぼ解った。

ウキペディアの英訳も転載

The Sixth Night

The dreamer hears that Unkei is carving Niō guardians at the main gate of Gokoku-ji. He stops to see, and joins a large crowd of onlookers. Unkei, dressed in Kamakura attire, is suspended high up on the work, carving away industriously, oblivious to the crowd below. The dreamer wonders how Unkei can still be living in the modern Meiji period. At the same time, he watches in awe, transfixed by Unkei's skill with mallet and chisel. A fellow observer explains that Unkei is not really shaping a Niō, but rather liberating the Niō that lies buried in the wood. That's why he never errs. On hearing this, the dreamer rushes home to try for himself. He chisels through an entire pile of oak, but finds no Niō. He concludes, in the end, that Meiji wood is hiding no Niō. That's why Unkei is still living.

#### 武内清（教育社会学）研究室

sociology of education

読解力のなさ＝浅はかな読み（自分のこと）

投稿日：2016年3月18日 作成者：takeuchi

自分の読解力のなさにあきれることがある。小説を読んでもうだらし、映画を見ても、肝心なところがわからず、人の話で「あー、そうだったのか」と納得することが多い。学校で国語の成績が悪かったのも無理がない。宮崎駿の映画「コクリコ坂から」を、親戚の小学生5年生の子と観に行った時も、肝心のところがわからず、小学校の5年生に教えられ、納得したことがある。

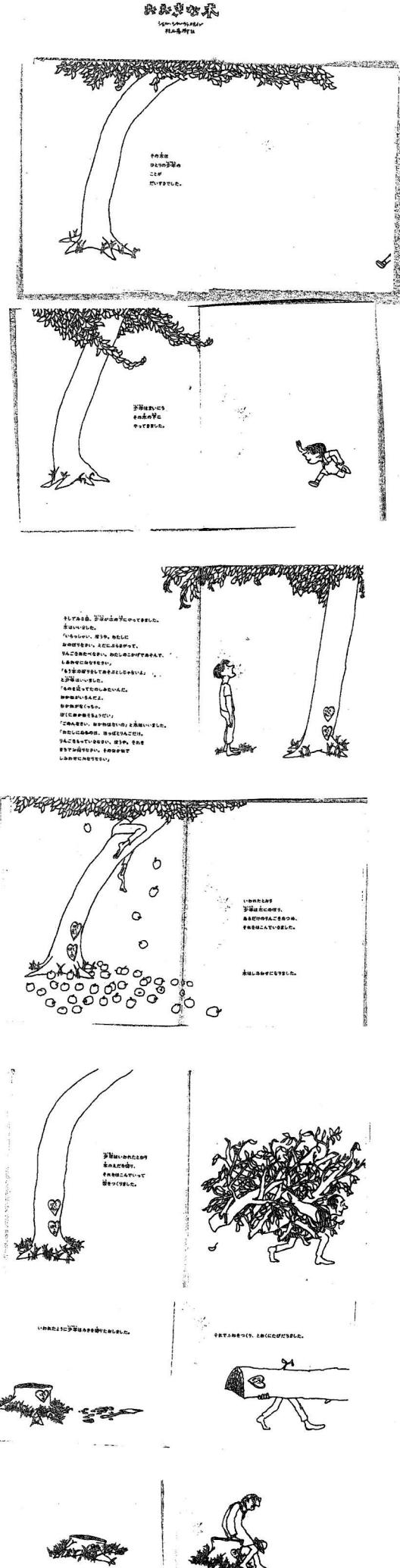
いまだによくわからない小説がある。漱石の夢十夜の第6話である（朝日新聞の3月16日に掲載されていた。下記に全文コピ）。この最後のところがわからない。

昔、「あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あの通りの眉や鼻が木の中に埋っているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ」の部分に感心して、「教育もこのように子どもの中に眠っているものを彫りだすようなもの」という見方があると授業で説明した時、ひとりの学生から「その読みは違うのではないか。漱石が言いたいことは、最後の言葉（「明治の木には到底仁王は埋つていいものだと悟つた」）ではないか」と指摘された。その学生の指摘に、なるほどと思ったことがあるが、実のところ、その理由がまだ判然としない。

すぐれた素材が埋まっている時代は、すぐれたものを作り出すこと（教育）や人（運慶）が必要ということを漱石は言いたかったのであろうか？

ネットでは、次のような解釈も見られる。（<http://azapedia.net/481.html>）

く第六夜一運慶が仁王を刻んでいるというのは、作るではなく掘り出すのだという芸術感がうかがわれる。天下の名工運慶は、こしらえたものではない、万物の造形主が作った仁王を彫り出した=創り出したのである。芸術の究極の理想であるが、結びの「ついに明治の木にはどうでいい仁王を埋まつていいものだと悟つた」というのは、明治の文壇・美術界への痛烈な批判であり、運慶という理想は生きていても明治の人間は眞の芸術・文学を創り出すことはできていないということになる>



## 二 セックスビュンダーのすれ

セラクス・ジョンソンによって問題化したのは、ジョン・マーティン・トーリア・タッカーの『性の署名』(Money & Tucker, 1976)にあつた。ジョンズ・ホプキンス大学の性統計の外業をうけめつてから今までには、半陰陽や性転換症候群などの患者を相手にして、ジョンソンがセラクスから独立してしまひにいたるも

生物学的に性別を決定する要因には、遺伝子、内分泌、外性器などの異なる因子がある。だが自然現象にある性別には、どのレベルでも連続性があり、男／女のような二項対立にはできていない。遺伝子ではX遺伝子とY遺伝子の組み合わせが性別を決定すると言われているが、現実にはXX(X雌性)やXY(Y雄性)のような組み合わせも存在する。XXの遺伝子をもった女性は今まで「雌性」と名づけられていましたが、だからといって「雌性」がとくに「女らしい」外見やあるまいを持つてゐるわけではない。X遺伝子とY遺伝子との二項的な組み合わせからなる遺伝子上の性差でさえ、二階類以上の組み合わせによる連続性

内分野の文でやると、自然的性差の連續性はもつとはつきりする。胎生時<sup>1</sup>の胎兒はすべて女性の身体的機能をもつてゐるが(マニード<sup>2</sup> カーはこれを「イギリス風」<sup>3</sup> と呼ぶ)、発生の途中で特徴的なホルモンのシナジー<sup>4</sup>をあげて、男性機能が分化していくと謂われている。発生学的には、男性は「雄<sup>5</sup>」女性<sup>6</sup>なのである。このホルモンのシナジーには発生の過程における臨界期があつて、それを越すとあらわしてはじんなホルモンを注入しても胎児の性別は変化しない。「女性ホルモン」「男性ホルモン」とは便宜上呼んでおられるこのふ

たつのホルモンは、その後も第二次性徴や育年期などにはだらうじて性機能を変化させる。内分泌学的にいえば、男性と女性のちがいは、だらこのホルモンのバランスのちがいにあります。それも一生物ううじて、また性開発をううじても、変化する。ホルモンの連続性からいえは、「世の中には「より男性的」もしくは「より女性的」の存在がある」といってよい。

外性器についても同じことが言える。出生時の性別は、とりあえず医師や助産婦によつて外性器の形状から臨時に判断されるが、これには間違いがしばしば生ずる。発生の途中で、なんらかの事情で男児の外性器が極度に小化したり、女児の外性器が肥大したりすることがある。まれには半陰陽といつて男女の外性器をともに生えて生まれてくる場合もある。性別判定の誤認があきらかになるのは、もううつ第二次陰茎術を運んで時である。女の子だと思っていたのに真々わががしたたり、ピカがはえてきたり、いつまでたっても初物觸れがつかないたりすることで、生物学的性別の誤認が発見されることがある。

すなわち、選ばれ、内分認、外性器のどれをとっても、自然界には性差の連續性があるのに対し、文化的な性差は中間領域の存在を認める。男でなければ女、女でなければ男と排他的な二項対立のいずれかに、人間を分類するのである。

アホーじゃ？ カーは、性戀の外で、性転換希望者の相談に携わった。したがって性転換希望者もしくは女として育てられて、第一女性期に性別の辨認のまちがいに悩んだケースが多い。カウントは当初、患者の生物学的な性別に心理的な性別を合わせようとする。そのほうが「自然」だからであるだけではない。性転換には、苦痛の多い身体改造などもない、時間もお金もかかる。かれらは現実をかわりに、「気持ちは持ちよう」を変えるよう、患者にすすめたのである。だがかれらが着想した

著者の「性自認（ジメンティ・アイデンティティ）」はその年齢までに強固に形成されており、それを棄てることは容易でないことをもじりその「指標」を強調すれば、患者はアイデンティティの危機から自己にさえ追込まれかねないものであった。多くの患者は、言語療、ベニス切除、造腸術のような苦痛の多い手術を経て、これまで、自分の「性自認」に生物学的の身体のほうを合わせることを諦めた。つまり、セラクスにジメンティを合わせるより、ジメンティにセラクスを合わせるほうが、まだ抵抗が少なかったのである。

アホーじゃ カーの業績は セラクスレシソーナーのそれを指摘したにとどまらない。もっと重要なことは、かれらの仕事は、セラクスがソノマを決定するという生物学的示現能を示した。一方で外性器に付いても、もし雌子やホルモンが性差を決定するならば、農業からは開拓の性別繁殖にもかかわらず、自然に「男性的」もしくは「女性的」な心理的特徴を発達させていたはずである。アホーじゃ カーは生物学的性差の基礎のうえで「心理学的性差」「社会学的性差」「文化的性差」が脚本上げられるという考え方がある。人間にとって性別とはセラクスではなくソノマであることを、明確に示した。人間においては、「雌子やホルモンが考える」のではない。言語が考える、のである。

同じ頃、フランスでは社会学者のエヴァリス・シェルロが、マネーとタッカーと同様な統論に学際的な研究からだりついでいた。

シーカスロが強調した解説もまた、第一に、セーカスは全世界でシンクタンクが活動されていてそれがセーカスを中心とするシンクタンクはすべてのものであること、第二に、シンクタンクの文化的な国際的影響力のほうは大きいであつた。

[opinion@newsproject.com](mailto:opinion@newsproject.com)

